

後記には、編集の概要とともに「吾々が今回の特輯號編輯に際して感じたことは第一に本校創立の偉才、天心岡倉覺三先生の深遠なる意圖であると共に、第二には名實共に日本に於ける官立の美術學校の眞價の程であつた。」「岡倉天心先生の雄大而悲壯なる美術的經綸を一瞬も忘却してはならないのである。」云々と、天心再認識の呼びかけが記されている。なお、編集後記によれば、同一方針による続刊が予定されていたが、打ち切られた。それは後述のように東京美術學校報国団結のため校友会が解散したこと、もう一つは昭和十五年秋に文部省が「學校關係出版物ノ印刷用紙節約ニ関スル件」の指示を下し、学内出版物の全面的廢合整理と特に雜誌の廢合を促したことに原因があつた。この指示は雜誌の全面廢止を命じたものではない。にも拘らず本校唯一の雜誌、伝統ある機関誌まで廢止してしまつたのは、当局者の認識不足によるものと言わねばならない。非常時下、生徒や卒業生が続々と戦場に送り出されて行く時代であればなおさらのこと、彼らの学生生活や活動の片鱗なりとも記録に留め、或いは彼らを励まし、或いは慰めるのが学校当局者の任務であつた筈だからである。翌十六年にかろうじて発行された『東京美術學校報国団報』は極めて貧弱で、校友会機関誌の伝統を継ぐものではなかつた。

## ⑫ 高村豊周の海外出張

昭和十五年十一月七日、教授高村豊周はアメリカ合衆国および中部アメリカ諸国へ十一月上旬から五ヶ月間の出張を命ぜられた。出張上申書（「昭和十五年 職員関係書類 庶務掛」）には出張目的が

次のように記されている。

本校工藝科教授參考資料ニ供スル為豫テヨリ歐米各國ニ於ケル工藝界ノ現状ヲ調査研究セシメ度考慮中ノ處今般商工省ヨリ同教授ニ對シ亞米利加合衆國及中部亞米利加諸國ニ於ケル工藝事情調査方囑託シ来リタルヲ以テ右應囑セシメ序ヲ以テ上述ノ調査研究ヲナサシムルニアリ

豊周の回想によるとこの出張は商工省が計画していたメキシコにおける日本の工芸展覽会のための下調べが主な目的だった。その十月にはアメリカは日本に屑鉄の輸出を禁止、戦争の匂いがはじめていたので、和田三造に「この時勢に行つたつてどうせ勉強など出来やしないから、やめた方がいい。帰れなくなるぞ」と心配されたが、メキシコという国土に妙に興味を感じて思い切つて出かけたという。

昭和十五年十二月十八日に竜田丸に乗つて出発した。翌十六年一月一日、サンフランシスコに入港し、三日にロスアンゼルスに上陸、その後ニューヨーク等を回つた。ロスアンゼルスでは一週間ばかり日本の出稼労働者の中に入つて一緒に生活したという。二月にはメキシコ市に入り、ガタラハラ市で近くのトラケペックの棕櫚の唐草模様の焼物を、プエブラではコバルトブルーの焼物やガラスを、オハカ市ではインディアン土俗品、素焼きの焼物やレボッソという染織を持寄る市場を見た。また、ウルアパン、オリナラで漆に似たラッカーを、タスコで銀細工を見て、タンピコ、ソチミル

コ、エルパソ等を回り、アメリカに再入国し南部のテキサス、フロリダを回ってニューヨークへ行った。ニューヨークで一月過ごして四月十一日、行きと同じ竜田丸にて帰国した。帰国後、「工芸の輸出——その根底の大きな問題——」（『報知新聞』）、「メキシコに於ける工芸事情」（『東京工芸』）、「メキシコの工芸に就て」（『輸出工芸』）、「汎工芸」に昭和十六年九月から「外游雜稿」を六篇連載（いずれも『高村豊周文集』Ⅲに収録）等、講演録や隨筆を發表、『自画像』にも詳しい。

なお、商工省より支給された旅費を儉約してメキシコの物品を蒐集し、メキシコのモデルルームを工芸指導所の中に作った。しかし、それらは戦災で灰燼に帰した。帰国後、高島屋でメキシコの工芸品を陳列したこともあった。アメリカでは喫煙具を集め、商工省に皆納めた。商工省に報告書を書いたという記述もあるが、報告書は現在、所在が不明である。なお、昭和十一年から毎年、同十七年まで商工省主催の工芸展が輸出工芸展覧会、輸出工芸図案展覧会、工芸品輸出展覧会と名称を変えながら開催され、豊周はその審査員を務めていたが、戦争が激しくなり中止され、メキシコの日本工芸展覧会も実現しなかった。

### ⑬ 紀元二千六百年奉祝美術展覧会

昭和十五年、文部省は挙国一致の国策を推進する一助として文展の代わりに紀元二千六百年奉祝美術展覧会を開催することとした。期間は前期が十月一日から同二十二日まで、後期が十一月三日から同二十四日までとし、会場は東京府美術館が充てられた。文部省と

紀元二千六百年奉祝会の共同主催、内閣紀元二千六百年祝典事務局および東京府協賛というかたちにとられ、作品については文展と同様に第一部・絵画（日本画）、第二部・絵画（油絵、水彩画）、パステル画、素描、創作版画等）、第三部・彫塑、第四部・美術工芸という区分に従って公募することとなり、委員長に細川護立、総務委員に菊池文部次官、歌田祝典事務局長、永井（浩）専門学務局長、岡田東京府知事らが任命された。審査委員は帝国芸術院会員および官展、在野団体の有力作家から選ばれた。その中の本校教官は次の十二名であった。

藤島 武二	清水 亀藏	南 薫造	結城 貞松
建島弥一郎	和田 三造	津田 信夫	朝倉 文夫
香取秀治郎	小林 万吾	北村 西望	田辺 至

### ⑭ 献納画の共同製作

「諸新聞切抜」（昭和十五年）を見ると、紀元二千六百年奉祝に関する記事が各紙に大きく取り上げられているなかで、三月一日の各紙に本校生による共同制作のことが報じられている。左記は『報知新聞』の記事である。

### よき年の記念に

海軍省と南京總司令部へ献納

紀元二千六百年に卒業する記念として美校卒業生が油繪を共同制作し海陸軍へ献奉する、東京美術學校洋畫科卒業生卅名は二班に分れ海陸兩軍にゆかりのある繪を共同制作する計畫をたて二千六